山口県立大学社会福祉学部紀要　第6号　2000年3月

『研究』の舞台としてのゼミを創る；「ゼミとは何か」を問う(試論)

Using the Seminar as a Stage for 'Investigation' − a consideration of the functions of the undergraduate thesis seminar

赤羽　潔
Kiyoshi AKABANE

はじめに

学生の減少によって、希望者が大学収容人数と重なる時期が間もなくやってくる[1]。その中で、私たち「大学人」は大学の質的転換を模索せざるを得ない状況に直面している。模索の方向・内容は、「探求機構」「社会適応機構」「モラトリアム機構」のいずれかにあると言える[2]。筆者は、第一の機構づくりの立場から模索を重ねている。そして、その焦点はゼミであると考えている。

ちなみに、大学審議会答申は高等教育の課題として「課題探求能力の育成」を謳っている[3]。このことは、大学で教育と研究に携わるものにとっては言うまでもないことである。しかし、それを具体的にどのように進めていくかは、我々大学教育に携わるものが開発していくべきものであり、そのことがどこまで推奨・保障されているかが実質的なキーポイントである。その意味で、答申は「課題探求能力の育成」を実質的な課題として期待しているのではないことをも語っている[4]。ここに、大学政策の揺れが象徴的に現われている。

ともあれ、筆者は上記の模索を5年間にわたって進めてきた。学生と向かい合うことを通じて実践的に探求してきた。その際の基調を学生に提起したものが、以下の所論である[5]。研究と教育と実践の統一を意識しながら著したものである。

1　ゼミとは何か

ゼミ・・・・・それは、ものごとの本質を探究する場である。人間的諸能力を思考レベルで展開する、密度の高い知的な時空間である。

私たち生きとし生ける者は、誰もが、その生を自らのものとして活かそうとする。確かめようとする。そのために試み、考え、学び、そして歩んでいく。あるときは無邪気に。あるときはなかまと共に活動的に。またある時は、ひとり静かに読み・考えながら。こうして、自己の内面の深層世界をも、対話の舞台に取り込んで行く。知的共同の舞台として開拓していく。その一つの到達点が、青年期を知的に構成しようとする大学生の姿である[6]。

この一連の過程には、生きるエネルギーが湧いている。生きるワザと知恵が生まれている。そして、そこに現象の背後を洞察する力が生まれてくる。未来を展望する力が生まれてくる。その力の内実は、探求と発見の喜びを支えとした創造の力である。これがゼミの源泉である。大学のゼミは、その力を創出・醸成・発動する機会を大学という場において特化したものである。

したがって、一般的な水準では、次のように規定されているとみてよい。

> ゼミナール；　①大学の教育方法の一．教員の指導の下に少数の学生が集まって研究し、発表・討論などを行うもの[7]。
> seminar　；指導教授の下で特殊研究をする大学の研究グループ、ゼミナール[8]。

2　ゼミとゼミ主体

このようなものがゼミであるとすれば、ゼミはその構成主体によって創られる以外にはない。

この構成主体は、まずは自らの願いや要求（知的要求）を支えとしてその場に登場する。そしてそこで、自らの願いや要求を実らせるための営みを展開する。次のようにである。

①一定の課題に向かって　（テーマ設定）
②対応する素材を媒介しながら　（レポート報告）
③探求的問いを向かい合わせつつ（研究討議）
④そこにこめられたものを探る（分析と総合）

こうして、自己の中に新たな知的開拓を図っていく。知的共同をひらいていく。相応のスタンスや技能を保持・発動しながら、それを行っていく。

ちなみに、知的要求とは、未知の世界への興味・関心である。そこに分け入ろうとする冒険の心である。そして、そこに開かれる新たな世界を夢見る心である。知的ちからに支えられて成す、憧れの世界である。このように多層的なものである。

そして知的開拓とは、その行動化・活動化の試みを心身の躍動に重ねて展開していくことである。かくして知的共同とは、特化された課題とアプローチの過程を共有することである[9]。

したがって、「知」への歩みは単なる「心」の問題に還元されるものではない。そこには、「心」の担い手である「身体」がある。身を向かい合わせ、課題に対応する知的関心をぶつけ、絡まり合わせる自他がいる。そのとき、初めてゼミは具体化される。

こうして、ゼミ主体たる者は、共に探求しあう他者に差し向ける知的要求を持ち、他者と向かいあう「身体」を持つ。そして、その具体的表現である「問い」と「意見」をもって、ゼミの時空間にそれらを絡ませ開いていく。これが、共同探求の姿である。さもなくば、それは単なるサロンである。（サロンとは、もともとは「フランスなどの上流婦人が客間で催す社交的集会」（広辞苑）である。）サロンは、真理・真実の探求の場とは異次元のものである（無関係ということではない）。

3　ゼミの課題

では、この研究室において展開されるゼミとは何か。この研究室は、山口県立大学において「『生活指導論』研究室」と銘打っている。だが、学会レベルの概念枠で考えると、「生活指導」というのは「看護における生活指導」「老人施設における生活指導」等と幅広い[10]。逆に、学校レベルでは「生徒指導」と同義におかれて極度に狭い[11]。しかも、実態的には「生徒管理」としてイメージされるほどに歪んでいる。それは、社会の管理化（社会の学校化）に伴うマイナス行為への介入的対応を「指導」と呼ぶ傾向とリンクした結果であると私は見ている。論理的概念としてではなく、実態概念として生かされてしまっている。

ちなみに、私は「生活指導」を「『生』命を『活』かす内容と方法を『指導』する営みである」と規定している。そして、この規定は今日ますます重要性を増してきていると考える。「生活」概念の内実と「指導」概念の探求とをつないだ統合概念だからである[12]。また、今日的には、自他関係のもつれが常に生の深部に通底するような状況の中であがいている老若男女が少なくない[13]。そこへのアプローチの鍵概念は、「治療」「カウンセリング」だけではなく、「支援」「援助」を内包する「指導」であると考えるからである[14]。

だが、山口県立大学社会福祉学部の研究室名としてはいまひとつ座りが悪い。そこで、私としてはこの研究室の実質的看板を『臨床教育学・教育福祉論』研究室とする。心理学的・教育学的知見を生かしながら、青少年の発達臨床・福祉臨床へのアプローチをすすめ、そこに新たな事実を生み出すことを課題としているからである。

したがって、学生諸兄姉には「社会福祉学部の『臨床教育学・教育福祉論』研究室で、子どもの成長・発達のしくみとそこにかかわる人間的・文化的条件のあり方を探求してきた」と言えるところまで、自己の知的ステップを進めて欲しいと思っている。このゼミは、次の三つのことを課題とし

ているからである。

①子どもの成長・発達のしくみを、具体的かつ論理的につかみ、現実の子どもの生きている姿を発達論的に読み解くことができること。
②子どもの成長・発達を促進する文化とそれを疎外する文化とを読み分け、子どもが生きて自らを活かす文化の特質・構造がどのようなものであるのかをつかむこと。
③この二つの文化の双方に実践的かつまた理論的にかかわることによって、子どもの成長・発達を保障すること、また子ども自身が自分の人生やそれの具体的表現としての文化を創るということはどういうことなのかを、事実において明らかにすることをめざすこと。

このことを、諸兄姉の専門的知見として自身の認識世界に拓いて欲しい。それを生活の中で豊かに培うべく歩んでいって欲しい。私は、密かにそう願ってきた。また、願い続けてもいる。そして、わずかばかりの機会を通してではあるが、そのことが達成されるようにと求め続けてきてもいる。

そして、大学生段階でこのことが達成されたとみなしうる者も何人かいる。それぞれの内的な趣は異なるものであった。だが、何者にも動じないあるものを築いていった。主体的要求と、その実現のための努力と工夫、それを支えとする楽観主義、それをエネルギーとした他者との協同である。その点が共通している。もちろん、他の学生たちもそれぞれ大きなものを培ったであろうことは疑いない。だが、まだ揺れていた。しかし、にもかかわらず、それらはいずれかの段階での大きな飛躍の支えどころになるであろう。あるいは、そうなって欲しい。そう願っている。

4　ゼミが生み出すもの

ところで、上記の課題①②③は、段階論的に構成されているものではない。それぞれが、「発達論」「文化論」「実践論」として独自に整理できるものである[16]。だが、これら三者を絡ませて現実を捉えると、現象の背後や内的構造がよく見える。現実を超えて展開されうる新たなステップとその筋道が、よく見える。だから、私の研究室では、この三者を統合的に捉えることを課題としてもいる。

その際、状況を整理するキー・コンセプトは

(1) 生命　(2) 自我・自己・他者　(3) 欲求・要求　(4) 存在・表現　(5) 関係　(6) 行為・行動・活動　(7) 共感・共鳴・共有・共同　(8) 指導・援助　(9) 生活　(10) 依存と自立・(共依存)

等々である。今年になって、(10) に「共依存」も加わった。そして、これらのコンセプトを使うことによって次のことを語ることができるようになった。

①その子の生命（力）は、いまどのような姿で表現されているのか。
②どのような関係の中で、それは表現されているのか。
③その表現は、どのような関係や活動において、受容・解体・再編されていくのか、等々。

たとえば、こうである。

「子どもとしての彼（彼女）らは、その存在の確かさを実感できる場でこそ、自己の欲求を気楽に突き出すことができる。そして、それを要求へと洗練・転化させていく。主体としての自己を登場させていく。それは、世界を共同で歩む喜びで心身を満たすことができているということである。そしてそこには、そのような流れに沿った援助や指導があるはずである。さもなければ、彼（彼女）が新しい世界に登場することは望めないであろう。自然発生的にはその世界は開かれないからである。もちろん、外的働きかけに従うだけで開かれるものでもない。そこには、すぐれて文化的な呼応が必要である。」

ちなみに、子どもたちが自立への道を歩む時、三つの要件が必要となる。一つは、存在における

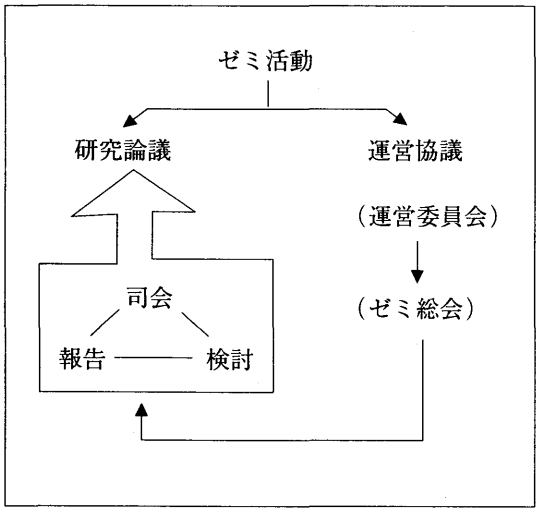
自発性である。そしてもう一つは、それに依拠して、かつその行方を定め拡げる生活主体の形成に向けての「援助」や「指導」である。彼（彼女）らは、現実の中で、自己の発達の系における矛盾と社会性の発展の系における矛盾という二つの矛盾をかかえているからである。さらにまた、生活それ自体が陶冶するという局面があるからである。

この三要件を押さえることによって、現在（いま）を未来(あす)につなげるための分析と総合の基本的視点が定まる。

5　ゼミ生間のメンバー・シップ

さらに、このような認識世界の開拓に重ねて、ゼミ生相互の関係づくりが、知的なちからをつける鍵になる。

ゼミ生相互の関係づくりの焦点は、人間関係づくりにあるのではない。焦点は、『知的ぶつかり合い』づくりである。



それが、『ゼミ集団』づくりの要である。『ゼミ集団』は、探求の推進エネルギーとしての、また探求の支柱としての知的リーダーシップに依拠して知的活動を展開していく。そこには、知的フォロアーシップとの対応関係がある。とすれば、問題のキーポイントは、

①自分の視点から整理すること。
②その際の焦点は、報告のポイントを共有すること。
③それによって、新たな知的水準へとその議論をいざなうこと。
④当然のことながら、そのためには討議に参加する者が自発的に意見を言うこと。それによって、ことは一層深化されていくのだから。
⑤すなわち、知的リーダーシップは、討議における発言の知的内容を組み立てることを課題とし、フォロアーはその組み立ての是非を内容レベルで問いながら向かい合うことを課題としている。

こうして、研究討議は、とりたてて限定された時空間の中で、密度の高い知的緊張をそれぞれの中に理知として開いていくことになる。

このような筋に立って、私たちは言う。

「このゼミが生み出すもの、それは子どもの発達についての理解である。子どもの文化についての理解である。子どもの発達保障に向かう実践（内容・方法・視点と論理）認識である。加えて、学習・探求主体としての生活力である。」と。

ここまで行くのは、容易ではない。子どもの事実を受け止めねばならないからである。そのための視点や方法を、諸科学の成果や事実に学びつつ組み立てねばならないからである。

先に指摘した学生たちは、その意味で自己の課題意識を対象化し、知的探求過程を構築した者たちである。課題や担当者からの揺さぶりに知的に応えようとした者たちである。情緒的な不安を知的な課題へと移し替え、情緒的な怖れを知的推進力へと転換していった者たちである。ここに主体の姿が現れている。

6　今日の大学生とゼミ

これまで、ゼミとは何かを述べてきた。しかも、実質的な水準で述べてきた。以下、このようなゼミ論を支える大学論を軽く述べつつ、再びゼミにつなげてみよう。冒頭に述べたような「少子化、大学『大衆化』時代の中での大学の課題は何か」

という問いが、我々の背後には常にあるからである。

さて、今日的特徴として語りうるのは、レジャーランドとしての大学、モラトリアム受容機構としての大学である。これらは、大衆レベルの学びが学校教育システムに過剰吸収され、また共同のre-creative stageとしての地域発祥の祭りにつながる精神的緊張（between realism and idealism）が経済システムの再編によって解体・消滅もしくは再編・変質させられてきたことの結果であるとも言える[17]。この意味で、大学のレジャーランド化、モラトリアム受容機構化には一面の必然性がある。また、それ自体は必ずしも否定的なものではないのかもしれない。若者の創るジョイフルな交流の広場でもあり得るのだから。

だが、このように言いつつも、今はそれを積極的に肯定できない。「本当にジョイフルな交流の広場になっているのか？」という問いに応えるほどのものが、まだ生みだされていないからである。むしろ、逆の流れがはっきりしてきているからである。認識における社会的要求の欠落、時間的見とおしの欠如、願望の中のrealityの欠如。ボランタリズムへの過剰同調、等々がある。たとえば、「地下鉄サリン事件」等々によるオームへの社会的批判が依然と強い中での1998年前後の若者のオームへの加入増加傾向は、「人生の祭り化」と「弱者救済」の名目との合体による私的癒しを行動化したものとみることができる。そして、同質のものは、大学生の自他関係のなかに広く胚胎されている。大学の中を徘徊している。依存と甘えの中での自己中心主義的心性の具体化として。しかも、これらは「普通の生活」を送る者としての日常性によって隠蔽されている。情報・物・市場システムなどの社会的条件の横行が、生活主体としての彼らの知性を自然性と主体性と社会性の統一された未来像から隔絶させているからである。

だからこそ、また、大学における知的探求は、この虚妄を看破し、そこに対するアンチ・テーゼを未来に向けて立てることであると考える。

ちなみに、本学の学生たちの動静は、如何。レジャーランド化、モラトリアム受容機構化の先進を切った大学の中に身を置いているなどとはとても言えない。そう見える。素朴だからである。質素だからである。地味だからである。そのような意見は、これまでしばしば耳にした。

だが、そこには自然認識と個性認識のズレから来る見誤りがある。素朴で質素で地味が生きるのは、そこに野に生きる強さ、したたかさがあるからである。野に咲く花のように、自然界のあらゆる条件を反映した美しさがあるからである。したたかさは根強さであり、美しさはその結晶であり、生きることにおける知性である。私たちが「素朴」と言う際に見るべきものは、見かけの素朴さの中にあるきらびやかさである。

だが、そのようなものはここにはまだない。軽薄・短小の思考と感性と、それを規定する依存性の方が強いとも言える。「一つの答えが与えられないと不安」という学生が少なくないからである。問いを立ててかかわる者が少ないからである。筆者の体験枠、経験枠の判断に過ぎないのかもしれないことを自覚しつつ。そして、このような言い方は、一部の学生たちには大変な失礼を重ねることになるのだが。しかし、あえて言う。

そこではStudyが消えているからである。消されているからである。その結果、大学機能の隠れたテーマは、私の目には「若者の心を癒すこと」または「干渉しないこと」になっているように見える一面があるからである。癒されることを求め、干渉されないことを求め、それゆえに課題にアタックすることが回避されていく。そのような学生の身の置き場になっているように、私には見えるからである。

7　「癒し」を超える

もし、大学の主要なテーマが、学生の疲れ傷ついた心を癒すことになるとしたならば、そこでは知的アプローチとしての『探求』は消えていくであろう。人間の知の世界を支えてきた『探求』の歩みとしてのStudyは消えていくであろう。一義的に『保護』の機能が要請されるからである。そ

してその保護は、Studyの求めるActivityの抑制を図るからである。Student-Activity（S-A）にこそ癒しが内包されている。それにもかかわらず、S-Aは求められなくなっていくであろう。言うまでもなく課題はstressorであり、探求の世界ではstressはあって当然と言える。だが、それがpressureになってしまうところに問題がある。囚われがそこに生じる。こうして、学生は課題を回避・無視するようになっていく。

そうなると、カリキュラムやその内容にかかわる問題は、学生からも教員からも問われなくなっていく。所与の枠組みを当然視しながら、そこに機械的な歩みと諦めを重ねていく。その兆候が、現在の状況の中にはある。こうして、問われることがらはいくつかに限定される。

①いかに容易に単位を取るか。取らせるか。
②いかに学生にストレスを与えずに大学から送り出すか。
③そのために、いかに学生と教員の間に軋轢を起こさないようにするか。
④（『探求』に擬しつつ）いかに素直に、忠実に指示に従わせるか。

恐るべきは、いずれも自他に対する『善意』の上にあることである。そしてそれゆえに、『探求』や『研究』の俎上に各項を乗せるのではなく、自らの『信念』や『癒し』の枠で固めることに疑念を持たないことである。

こうして、LearningからStudyingへの転換の契機は問われなくなっていく。ストレスと知的緊張との差異は問われなくなっていく。軋轢の質は問われなくなっていく。もちろん、講義とゼミの連関性、『探求』におけるゼミ固有の核心性はゼミ構成員とは無縁のものとなり、ゼミの場からも消失していく。日々は漫然と送られ、やがては、大学教育もまた『探求』と『創造』の舞台ではなくなっていく。通過点としての癒しのパッケージとなっていく。繰り返すが、「善意」の中でである。

8　生きること・学ぶこととゼミの役割

だが他方で、若者の迷いはまた、大学がそのような水準にとどまることを強く拒否しているようにも見える。「教えられることによる学び」から「探ることによる学び」への転質が、まだまだ、いや確かに見られるからである。それを通じての「探求と発見のプロセスを拓く」姿が、確かなものとして見られるからである。その姿は、一方では、知的に共有しうるものを探り拓くちからを持った『探求者』の姿である。そして他方では、自ら生き、自らを活かす人生の創造主体としての姿でもある。

望むらくは、わが大学、わが学部、わがゼミの中ではその姿を当然のこととしたい。その志向と、意味づけと、そして協同性、知的ちから・文化的わざの獲得を課題とする姿を求めているからである。制度的大学の中で、たとえ少数者であっても、それは現象的少数（マイナー）としての少数者の意味にとどまらない。展開の要としての少数者である。そのことは、これまでの実績・実質が語っている。卒業研究のいくつかを見れば、それがわかる。

さて、私たちは今、このような水準まで遡って大学生活を問わなくてはならなくなっている。それほどに、制度ではくくりがたい大学像が探られている。そこで問いを立ててみる。「あなたは今、どこに位置しているであろうか？」と。

①気楽な日常の中で、こだわりなしに、「今」を気楽に通過中。
②制度化された単位構造の中で、忠実な歩み造りに腐心・まい進中。
③気楽な生活の中で「最低限」のことをやって、後はなりゆき任せ。
④日常の気楽さに不安を覚え、何かをしなければと焦りながらあれこれ手出し足出し。その忙しさの中で焦りふつふつ。
⑤やりたいことを絞ってこつこつ。自分なりの探求を楽しみながら重ね中。だから、ゼミは楽しくて仕方ない。

いずれにせよ、事実は未来につながり、未来の事実がその意味を検証する。そのことを展望しつつ、これらを社会的状況の中に位置づけてみれば次のように言えよう。

今日の経済的・文化的状況の中では、便利にして快感を届けてくれる消費財があふれている。そしてその背後には、壮大なる生産・流通機構があり、大量の消費者層を組織化するメカニズムが動いている。併せて、低賃金労働者層を厚く組織する構造がある。①③④の一部、そして②は、確実にその予備軍として体制内化されていく。大学のレジャーランド化・モラトリアム化は、①③④の一部の文脈とリンクした姿である。⑤とは無縁である。こうして大学は、一方では短期大学を切り落とし、他方で大学院へと従来の機能をスライドさせながら、そのレジャーランド化に呼応すべく国立大学の独立法人化へと道を探っている。それが、大学の現状の一面でもある。

だから問うのである。そして、20余年後に再びここでの議論を想起して欲しい。あなた方の子どもが大学生となる時期に。

9　新たな知的舞台としての大学の中に確かなゼミを！

もう少し言おう。社会は、一見、多様な価値観が並存しているかに見える状況にある。だが、それらは単なる並存状況にあるのではない。「自由」の名の下に「屈従の自由」を選択させていくような構造の中にあるのだとも言える。課題に向かうときに、いかに無能(disable)な自己を自虐的に責めるか、もしくはそのような自己にいかに無関心なままに通過するかを見れば明らかである。

その構造を看破できないとき、私たちは直接・間接の衝撃的な事態との遭遇の中でしか、その構造を考えることができなくなっていく。自虐だけではない。私たちの眼前に突き出される青少年の社会的犯罪も、その事態の一つの典型である。

だがそれだけではない。加えて、上記のような疎外構造を看破できない者は、犯罪者を特殊「反人間」的存在とすることによって、自己を正常視することに狂奔する。かつ、それによって、「普通」「一般」のカテゴリーに自己を収め、一抹の安心を得ていく。これは、リアリズムを欠いた自己防衛機能の発動である。そして、ますます屈従の世界に心身を投ずる道である。

これを拒否する道はただ一つ、『探求』の道を開拓することである。事実と論理の世界に探りを入れることによって、真理と真実を求めていくことである。その道を歩むことである。『探求』の世界には、内容と方法と意味が措かれる。それらの関係が主体によって構築される。問いなおされる。そして、それが一方では認識として主体化され、他方ではレポートや論文として言語化・社会化される。人間の知性の創造的表現の一端がここにはある。

だが、大学においてさえも、この道はしばしば封じこめられていく。遮断されていく。事態は深刻である。

私たちの知性の問題は、心身の問題とつながっている。そしてそれは、エネルギー問題や人口問題、食糧問題などと余りにも似ている。大きすぎて、問題がないように見えてしまう他方で、確実に足元とつながっている。確実に自分の問題でありながら、世界的に共通な問題である。今の問題でありながら、未来を通底する問題である。

そうだとすれば、すべての人々がそれぞれの立場から、自らの人生をも含めて、あらゆる事柄を自らの目で見定めることのできる時代に私たちは生きているのだとも言える。すなわち、生きにくい時代なのではない。自らの人生を、土台から自分で創ることのできる時代なのである。

だとすれば、焦点は明確である。

自分の原点を持つことである。現在の、「ここ」の立脚点を、この上なく大事にすることである。すなわち、自らの心身に織り込まれた現下の知的水準・方法的水準・感性の中における肯定面を汲み取り、それを大胆に活かすことである。それによって、知性の開拓における試行錯誤の過程を歩むことである。子どもにおいては、夢や希望に向かう『試行錯誤』がその原点を確定していく。青

年においては、『課題探求』がその原点を検証・確定していく。その文脈の上に立つことである。

このように、自分のちからで未来に向けて『試行錯誤』を重ね、密度の高いステップを拓くこと。それができるのが、いまの時代状況である。『学び』という『探求』によって、自らの生命の深部（人類の歴史と個人の尊厳）から今を見つめることである。そしてまた、歴史と社会に開かれた人々の経験を自らの経験に重ねて見つめることである。そのようなことができる時代状況の中に、今の私たちは立っている。

そうだとすれば、あふれる情報をいかに自立への課題に見合うカタチで組み立てるか。またその方法を、いかに共同の学び・批判的な学びとして組み立てるか。それが鍵である。そのような場の存在の有無・創出の成否が鍵である。

ここに、再び、ゼミの必要性と必然性が現れてくる。『共同探求』の必要性と必然性が現われてくる。こうして、いまや、家庭でも、学校・学級、また様々な職場でも、『探求』と『創造』の必要性と必然性をどう手にできるかが問われている。「対話・討論・討議」を通じた『探求』と『創造』の過程を開拓するちからが問われている。

「子ども虐待」「親虐待」「没家庭家族」「家庭内離婚」「不登校・登校拒否」、また、個人の人格世界における「不定愁訴」「企業戦士的自己喪失」、さまよいシンドローム現象。これらの状況の背後には、『探求』と『創造』のちからの欠落がある。そのちからが剥奪されてきた文化的な翳がある。

だから、これらの状況に包まれている者は、当事者の自立的な自分探しの旅に寄り添っているつもりで、逆に、状況に深く囚われてしまっているのかもしれない。そして、それにもかかわらず、『探求』的・『創造』的自己の登場場面を彼らの中に創ろうと模索しているのかもしれない。そして、それが果たせずに苦悩し、精神的爆発状況に追いやられたり、すくみこんだりしているのかもしれない。その動因は、模索における自己抑圧と認識上の錯誤（点数学力・金力・権力等々の崇拝）にある。これらとの闘いをどう組むかということこそが、実は、『知的共同』の文化論的焦点なのである。

この意味で、ゼミはその誤った模索を『知的探索』に組み替え、錯誤を内容と方法の統一された『リアリズム』の世界へと転質させるものである。この意味で、ゼミとは、物神化されたパワー・ゲームに屈することのないちから（『知のちから』）を共同創造していく場である。まさに、『自己』を『自己』として生き活かすことの正否を決する機能を担うものである。

その筋道は、簡単に言えばこうである。

①私たちは、自己のかかげる焦点的課題に向かうべく集う。
②そして、試行錯誤を重ねつつ課題を立てていく。
③その過程は、問題提起・論究・問題の解明過程でもある。
④それゆえに、知的共同の営みであり、共存・共生の営みであると言ってもよい。それは、一人だけの思考枠を超えた思考となるからである。
⑤結果、自己の思考において他者のそれを取り込み、『探求』と『発見』が行われる。
⑥結果、他者は他者の固有性に生きていることが事実において確証される。自他の区別と統一が、ここに成る。
⑦その舞台こそが、ゼミである。言いたいことを言い、ぶつかり合いを含む『知的協同』が展開される場、それがゼミである。

これらによって未来に新しい地平が拓かれる場、それがゼミである。

だから、時と場の主体として、その時々に自己の心身を登場させることである。そこに、ゼミがあなたのちからで成っていく。ゼミによって、あなたのちからが成っていく。それが現実であり、未来に一貫される筋である。そう考えられる。

あらゆる場に、それとしてのゼミを創ろう。ここにその原型を創ってみよう。ここに、そう呼びかけたい。ゼミ合宿は、その大きな契機であった。

何人かのゼミ生は、確実に合宿で知的脱皮を果たしていった。

そのようなゼミ活動の展開が、これからの大学教育の中では求められている。それが、歴史軸と社会軸の交点で転換期を示している大学の語るところであると筆者は読んでいる。

1　現段階では小学校1年生が約120万人、大学進学率が45％で約80万人である。15年後の状況は、容易に推定できる。同様の推計は多く行われており、具体数に若干の幅はあるにせよ、基本的に同じである。

2　理念・カリキュラム・教育方法をめぐる大学の自律性によって、いずれに向かうのかが大きく規定されていく。

3　大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について――競争的環境の中で個性が輝く大学――（答申）　」（1998年10月26日）の「第2章」の「1　課題探求能力の育成――教育研究の質の向上――」

4　同上の中で「今後、専門性の向上は大学院で行うことを基本として考えていくことが重要となる」と述べることによって、相対的に大学教育における専門性の向上の課題を曖昧にしている。

5　この提起は、夏合宿における卒業研究中間検討に先立つプログラムとして行われてきた。その中の洞察が資料的に裏付けられた部分は、注記した。合宿場所は、次のとおりである。

1996年（平成8年）8月　長野県上伊那郡高遠町
1997年（平成9年）8月　山口県大島郡浮島
1998年（平成10年）8月　山口県熊毛郡上関町
1999年（平成11年）8月　長野県南信濃村

1996年までは、文学部児童文化学科の学生への問題提起も重ねていた。

6　ここには、筆者なりの発達論的規定がある。その青年期論は、近刊予定の『20歳の精神によびかける――「劣等感」に輝きを』に詳論している。

7　広辞苑　1991年

8　『KENKYUSHA'S NEW ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY』

9　「知」を筆者はキー・コンセプトとして多用している。が、これは、「学校知」に象徴される「制度知」ではない。『探求』と『発見』につながる「経験知」と「理論知」の統合としての「知」である。

10　「日本生活指導学会」の設立は、この視点によっている。また、同学会編集の『生活指導研究』は、この視点から編集されている。

11　竹内常一『生活指導の理論』1971年明治図書

12　今日の状況は、「生活」概念が生産活動と切り離され、また「指導」概念が否定されるところに特徴がある。

13　DV（ドメスティック・バイオレンス）、AD（アダルト・チルドレン）などの問題が注目されるのは、このためであろうと考えられる。

14　「『指導』は『拒否する自由』を前提にして成り立つ」というのが、これまでの「生活指導研究」によって明らかにされてきたところである。この認識が、日本においては決定的に弱い。（全生研編『学級集団づくり入門』小学校編・中学校編　明治図書が参考になる。）

15　「臨床教育学」という用語は、近年頻繁に使われるようになってきている。状況への対応性と理論的発展の両者が生み出した概念と見てよい。これまで「臨床」課題は心理学と実践世界に委ねる傾向があったことの証左である。

これに対して、「教育福祉」という用語はまだ使用されていない。日本の学校教育の構造的曖昧さは、そのカリキュラム構造の多元性と相俟って概念的に揺れている。

16　筆者の「臨床」におけるアプローチは、この三点からの論及によって構成されている。

17　日本の大学論をこのような視点から論じているものを、筆者は知らない。筆者は、日本の学校教育の変質過程、地域の教育力の変質過程への理解を基礎に、このような視点を置いて大学の中に立っている。

SUMMARY

Using the Seminar as a Stage for 'Investigation' — a consideration of the functions of the undergraduate thesis seminar

Kiyoshi AKABANE

As university professors, we are standing on a stage, the university, with the responsibility of giving our students satisfaction in studying about truth and how to find it.

The undergraduate thesis seminar is the key stage of that process. This paper is an outline of the role of the seminar based on this way of thinking, as well as a concrete 5-year plan for creating a seminar to fulfill this role.